成城大学国文第六回生
昭和四十九年五月一日発行

# 花信風

第七号

花信風

# 目　次


敬老心……高田瑞穂　1
故　舊……田中克己　3
「母親の心得」について……坂本　浩　6
板チョコの割り方について……山田俊雄　9
暗い季節……栗山理一　14
幼年時代……池田　勉　16
小野田少尉と教育……紫藤邦子　20
おめでたい女の話……高橋睦美　23
林武著「国語の建設」・三人の師へ……佐藤美智世　25
#そ#そそ#そそ、ふあそふ#あどど……木全麻智子　30
ある日突然に……堀内久美子　33
霙ふる日に……林　節子　37
半年の成長の記録……石山正美　39
我が家の菜園……本谷俊子　41
成城学園みてある記・オサルさんとネズミさんのお話……八木都久子　43
娘のおけいこ……武樋路子　46
毎　日……横山育代　48
平凡な生活……高橋和子　49
千里の家……森川庸子　50
近　況……長浜宏子　51
思いやる心……近藤由紀子　52
近　況……高橋和子・佐々木美岐・本多弘子・重見泰子　54
編集後記……56
住所録……57

# 敬老心

高田瑞穂

私の内に最近強く盛り上りつつあるものの一つは、敬老心である。道を歩きながら、杖をついてとぼとぼと行く人に出会うと、歩道のわきにしばらく立ち止って、自分の前を通り過ぎるのを見守る。中には、そういう私ににっこり笑いかける人もいる。私の方も、自然に、にっこりする。

この心情は、あるいは年老いた私のエゴイズムであるのかも知れない。過日小田急の電車で、見知らぬ二人の青年に席を譲られた。成城の学生かな、と思ったがそうでもないらしい。「有難う」と腰を下し、一人分あいているところへどちらかおかけなさいとすゝめたが、「いえ、結構です」といって出口の方に行って立っていた。新宿で下車の折、私は二人の肩をポンと叩いて、もう一度「有難う」と言ったら、驚いた二人は、直立して深く頭を下げた。この些事が、その日一日の私の内を明るくした。嬉しかった。これは単に利己的心情ではない。そこに多少の感傷的なものの介在することは否定しないが、それも単なる感傷とは思いたくない。

×

去る三月二十日の水曜日は、目のまわる一日であった。十時から卒業式、式後広場での祝賀会、三時から経済学部の先生たちの祝宴に顔を出し、中座して四時からの四年A組のパーティに出なければならなかった。一時半ごろ広場から引上げて二号館の部屋に帰ると、博士過程を修了した高橋が、部屋で待っていた。そして、部屋の片隅に



掲げてあった短冊を是非記念にほしいという。喜んで渡した。高橋が去って一人になり、ホッとして煙草に火をつけた私の目に、空白の額が映った。まだ一時間以上余裕がある。一寸家へ帰って、代りの短冊を持ってこようと、外套に手を通して家に向った。空には一点の曇りもなく快晴である。風は少し冷たい。酒気を帯びた頰をポン〱と叩きながら坂道を下り、いい気持であった。そのときふと、郷里の母のことが頭に浮かんだ。それと短冊のこととが一瞬結びついて一句が浮かんだ。

彼岸会や老母の頰の薄ら紅

帰って早速この速成の句をしたためた。三週間ほど前、数日帰郷して会った老母の姿、六十をはるかに越えた私に、「転ばないように」というその声、私にはやはり有難かった。そういう気持が果してこの句に内包されたかどうかは知らない。しかし私は満足した。

×

庭の紅梅が咲いた。今、その花を眺めながら筆を執っている。庭の小さな池の半分を冬中おおったビニールの被いを先日取り除いた。金魚の数はやはり半減していたが、生き残った十数匹は元気である。早速小粒の餌を撒いた。大小の金魚が集ってきた。見ていると、大きな金魚とぶつかりそうになると、小さな金魚を身をひるがえしている。私はそういう小さな金魚が可愛かった。あれも敬老かな、と勝手なことを思いながら、勝手な作文をしたためた次第である。

# 故舊

田中克己

わたしが高校生の時
かれは「戦争」といふ詩集をかき
わたしは冬衛の「軍艦茉莉」と同じ位
それを愛読した。
大学生にわたしがなると
本当に戦争がはじまり
わたしは彼を予言者だと思った。
一九四二年わたしは彼と「緑丸」といふ
ボロ舟に積まれて南方に向った。
シンガポールに着くと彼は軍属の代表として
部隊長に申告した――彼は年長で大学出だったから
戦争のあとをと彼はマライ中を撮してまはり
わたしはスマトラを撮さした、
そんなフィルムはどこでどう処理されたか



わたしのフィルムはここでストップする。
自動車事故でわたしは人事不省となり
そのあと英語をちょっと忘れた
彼はそのしらせを聞いて「悪夢」といふ小説に
「田中は頭がおかしくなった」と書いた
二十年たってわたしは家内と買物にゆき
やはり奥さんと買物してゐる彼に遭った
わたしは簡単に挨拶し
彼も簡単に答へた（わたしたちはおかしくなってゐたのだらうか）
その後の十五年間遭ってゐないが
旧姓村上ミチヨが彼の弟子になってゐると
けふ聞いてわたしはしばらく思ひ出してゐた
「故旧いづくんぞ忘るべけんや」
高見順や中村地平や同船で帰った友だちは
もう道山に帰しわたしは漢文をよんでゐる
毛沢東の論語もよんでゐる
「故旧は棄てよ」とそこに書いてあるが

わたしはその行をまだ見つけてゐない

（一九七四・三・一〇作）

## 旧姓村上ミチヨの弁

古本店で見つけた月刊詩誌、二十四年間も続いている北川冬彦主宰の「時間」をみつけ、その北川冬彦氏が荻窪の画廊で詩画展を催した際、購読を申し込み、高田先生の木原信輔を勝手にもらって、柊子を、とうこと読むものと感違いして木原柊子の筆名で投稿をすることとなった。新人を養成する欄、「芽欄」に、今年一月号、二月号、四月号、五月号と二篇位づつ入選し載ることとなり、コツコツと詩作してきた私としては、北川冬彦氏の選評や、同人の人達の作品を読むことで、毎号とても励みとなってきた。しかしながら、田中先生がかゝれている弟子という語にあてはまるとはとても言える段階ではないと思う。もっと北川冬彦詩学を学び、納得し、もっと自身も深く詩作とかかわりあってこなくては弟子とはいえない。現在は、高田先生から時折、いただく詩評がひどくこたえる。詩は常に時代に対する厳しい批判精神が、その底に流れていなくてはならない、という言葉は、私に常についてまわっている。



# 「母親の心得」について

坂本　浩

このごろ作家に関する資料についての関心が一段と強くなってきた。つい先だっても石川啄木の書簡が二百九十万円という高価な値を呼んで話題になった。ある作家の住んでいた家が空家になると、屑籠や押入れはいうに及ばず、襖の紙まではいで何かないかと探しまわるという狂乱ぶりである。これらの資料の中には、もちろん作家の伝説や作品の解明に重要な役割りを果たすものもあろうが、単なる骨董品や隠し財産として珍重される類も多いことと思われる。

ごく近年のことであるが、北海道の「北海教報」というキリスト教の機関誌に、国木田独歩の文章と思われる一文が発見された。明治三十二年十二月二十日のものだから、今から七十六年も前のもので、独歩が数え年で二十九歳の暮れに書いたものである。それは「母親の心得」という原稿紙で八枚ぐらいの随想である。独歩と推定されるのは、その筆者が遠山雪子という女の名前になっているが、これは独歩の筆名であるからである。君たちにも参考になると思われるので、その内容を紹介しながら多少の解説をつけ加えてみようと思う。

初めに「序」にあたる部分があり、子供というものは「まことにかあいらしい貴いもの」であるが、それは「天地の間に溢れて居る「愛」の象徴ともいうべきものだ——と書き出している。天地間の愛とはキリスト教の発想であるが、子供にその象徴を見ている点において、独歩が好んで「少年物」を書いた理由が見いだせると考えられる。

次に数項目にわたって、具体的な例をあげ、それらに対処すべき「母親の心得」について述べている。

① 子供は何か為ているとき、親の顔をのぞくことがあるが、すぐ手出しをして助力してはいけない。知らん顔をするがよい。なぜなら、「子供の独立心を養生」し、「世人の褒貶に関せず。自分にてよしあしを考へ定むる力」を与えることが大切であるからだ――と説き、母親のきびしい態度を要請している。

② 子供にヤキモチとか癇癪とかを起こさせるようなきっかけを作ってはいけない。幼い時は世間の俗情はなるべく知らさず、純心に育てあげる心得が必要である。

③ 短気とか聞きわけがないことを言う場合には、厳として戒めねばならぬ。将来親の言うことを聞かず困るようなものが出てくるのは、幼い時のしつけが不足しているからである。

④ 初めにはやりやすいことを言いつけ、その習慣がついてから「難き事を云ふ」というようにして、実行力のある人間に育成すべきである。

⑤ 泣いて逆い、理にかなわぬことを言い通そうとする時は、「如何に卑劣なるかをやさしくきかせて」やり、「子供の貴い美はしい性質」はそれを発揮し、「わるいことのきざす時には」「きざしのうちにもみけす」のが賢明なやり方である。

⑥ 食物の好き嫌いはできるだけなくするよう気をつけ、栄養のあるものを適当に食べさせ、身体の成育に十分心を配らねばならぬ。これは、幼時のしつけ次第で容易にできることである。

⑦ 子供には「恐れと云ふことを覚えさせ度くない。」「こはい」ということばは慎むべきである。

⑧ 「子供はよく物をきゝたがるもの」であるが、「益あることなら充分問はせ」、「他人の事にたち入るたぐひ」の好奇心は取りしまらなければならぬ。



⑨ 「何かなしはじめ」たら、「つとめて為し終ることを習はせる」ことが大切である。

⑩ 一家に病人などある場合には、「其病の容態を子供の理解する程に云ひきかせ」、「出来るならば病人の為、一寸した用でもさせ」、それを楽しみとするように導かねばならぬ。

最後に「結び」として、子供は「神様から教育を託された大事のあづかり児」と思い、以上述べたようなことに「準じて万端に注意したら、「今のあいらしさ、お子様方が成人なさり次第、高い清い立派な方になると思います」と結んでいる。

①独立心、②純真、③自制心、④実行力、⑤道理、⑥保健、⑦勇気、⑧求知心、⑨有終、⑩同情、の理念に基づいていることが推察され、独歩の少年観の基盤が網羅されていることがわかる。これらの理念は直接・間接に彼の「少年物」に描出されるもので、作品鑑賞の上で、大きな手がかりを与える一文といえよう。

明治三十二年といえば、独歩が先妻の信子と離別してから三年後に当たり、後妻の治子と結婚した翌年で、この年の十月二十九日には治子との間に長女貞子が生まれている。この長女の誕生が「母親の心得」の執筆動機とも考えられなくはないが、先妻信子との間に離別後に浦子が生まれ、ちょうど満三歳になる直前であったこと、この文章は「三ツ四ツ」の子供の育て方を書いた点などから考えると、あるいは独歩の頭には別れた信子のことが去来していたのではないかとも推測されるのである。

信子は独歩と別れた後、母とともにしばしば北海道に行っている。「北海教報」には母親の豊寿のことなども報じた記事が出ているところから見ても、また独歩は信子が北海道に住んでいると信じていた事実などから見ても、彼の胸中には信子がりっぱな母親として浦子の教育に尽力することを祈り願う気持ちがあり、「母親の心得」と題

して北海道の「北海教報」に発表することをうながしたとも判断できるであろう。

もし、それが正しいとすれば、独歩が初めて信子との間に子供が生まれていたことを知ったのは、その二年後の明治三十四年十月、「報知新聞」に信子と武井勘三郎の「大怪事」が暴露された（有島武郎の「或る女」前篇に描かれた葉子と倉地の「某大汽船会社船中の大怪事」）時点であるという相馬黒光の説（これが従来の定説）は訂正されることになる。

ともかくも、独歩に関するこの片々たる資料が、彼の「少年物」を解明する鍵としても、信子事件のその後を示すものとしても、あるいは独歩のヒューマニズムの一端を表わすものとしても、非常に重要な意義を持つわけであるから、こういう資料は研究者にとっては価値あるものといわなければならぬことになる。（四九・三・六）

# 板チョコの割り方について

山田俊雄

毎年クリスマスの頃になると、親戚のある家から大きな板チョコが届く。私流にたとへて言ふなら、その姿形は、表紙に渋を引いた美濃判七八十丁ほどの和本一冊ぐらゐのものである。いつも、当世風の半透明の合成繊維の袋に密封してあって、さらに外箱に収めてある。

季節が近づくと忘れずに私の家の分も勘定に入れて注文して置いて届けて来て呉れるのである。数年前まではチョコレートなら何で嬉しがってゐたうちの子どもも、今はさうむやみに歓ぶわけもないのだが、この板チョコだけ



は格別で、例年通りに届くと誰からとなく早速に包みを披いて見る。今さらとも云はず、これがいつも家中の話題になるのが例である。

厚さが厚さであり、形も大きいので、密封した袋のままで、下に雑誌などを宛てがって置いて、鉄槌で叩いて全体を小さく割ってから封を切る。これが私の家での割り方である。多分最初は私が始めた方法であらうと記憶するが、今ではうちの誰でもがさうして割ってゐる。

暮れのある日、親戚一同が会食をした時だったか、その板チョコのことが話題になって、まるで俎のやうに見えるそれの割り方のことに及ぶと、意外なことに、他の家では、割るのにいつも苦労するといふことだった。袋から出して、テーブルナイフを使ってみたり、アイスピックを用ゐたり、時には出刃包丁まで持ち出すとかいふ。いづれにしても鋭利な刃物で硬いものを割るのは、表面が滑りやすくて手許が危い上に、かけらや粉が四方八方に散る、仮に大きな紙や布を敷いてみても、直接口に入れるものだから、何となく不衛生な感じがあって、それが嫌だといふわけである。

そこで、私のうちでの方法を披露すると、皆、それは成るほど簡単でうまい工夫だといって、誉められた。うちの子どもは、他の家の苦労を、いかにも論外だといふ顔をして見せた。

その日の夜、家に帰って煖爐のそばで、またその談に及び、さういへば七五三の千歳飴だって、槌で割ってゐるぢゃないか、金太郎飴やブライトンロックにしてもさうだらう、それはうちではずいぶん古くから知れ切ったことだ。といふことになった。

それはさうだが、私がその方法を自分で考へ出したかといふ事を改めて考へてみると、独創でも何でもないこと

を思ひ出した。

袋に入ったままを槌で割って全体を小さな破片にして、それから封を切るといふ順序次第は私にとって実は小さな頃の経験の積み重ねの中で得られたことであった。

その一つは、古いことでよく憶えてゐないが、土佐の高知のみやげ物に、「かつをぶし」といふ名の有平糖があった。今もあるかどうか知らないが、肉桂の入った飴で、東京風には栄太楼の飴ほどの小さな玉になってゐる方が食べ易いのに、わざと鰹節の形にした、どちらかと云えば不細工な粗大なものであった。その飴を食べるのに、小さな鉄槌が、付けたりについてゐて、その槌で叩いて缺いて小さくして口に入れるやうにといふ意味のdirectionが袋に書いてあってあったやうに憶えてゐる。袋のままでと書いてあったかどうかはあやしいが。

今一つは、「かつをぶし」と大同小異のもので、伊勢の山田に「生姜糖」とならんでみやげ物としてあったもの。記憶では「伊勢海老」といふ、至極単純明快な名で、これも有平糖で海老の実物大を横にしたものであったようだ。有平糖といふことばは、いふまでもないが、もとポルトガル語の alfeloa であったと考へられてゐる語で、金平糖の confeito と並べられる。金平糖は confeito の全形を漢字に写してあるのに対して alfeloa の方が有平糖となったのは聊か疑念が残るもので、金平糖の用字のアナロジイかも知れぬが不明である。土佐と伊勢との両方のが、私のおぼろげの記憶の通りに、いづれも有平糖だったとしたら、その起源・由来に一種の exoticism を共通にみとめることが出来よう。ブライトンにおけるロックのキャンディーのやうに遊楽地のみやげ物といふ点で相似た飴に、日本では別に加ってゐるこの exoticism は、これはこれでまた別の話の種にもなり得るが、ここではしばらく措いて、本筋に戻ろう。



「かつをぶし」や「伊勢海老」の話を出してゐるうちに、さういへば金剛山の松の実にも、やはり小さな鉄槌がついてゐたと家内が云ひ出した。ロックキャンディの堅さと松の実のからの固さとでは少々話が違ふけれども、つけたりに小さな鉄槌を添へて売ってゐたところは似てゐる。実は、金剛山にも松の実入りのロックキャンディが売ってあった筈だと私は思ふが、話が段々にひろがって、ワシントンD・C・滞留中に、ポトマック河畔を下って潮のさし引きのあるあたりにあるクラブハウスで蟹の塩茹でを食べた時に、一人々々に持たされた二・三十センチほどの木の丸い棒のことに移って行った。パプリカを真紅といふまでに一杯にふりかけた塩茹での蟹の甲を、このスティックで叩き割ながら実を出して喰ひつく蟹料理の野性味とともに、日本にはないそのスティックそのもののことをも忘れられないでゐた。

それはともかく、この時に気づいたのは、私の板チョコの割り方の方法が、さきの有平糖のみやげ物に付いてゐた鉄槌に由来することが殆んど疑ふ余地がないといふことであった。また蟹の甲を割るに日本人は棒など用ゐないことにも一つの意味があるのに気がついた。

もし、私に、飴についての忘れかけてゐた経験や知識が全く欠けてゐたら、果してどんな方法をとってゐたことであらうか、これが第二に私の脳裡を掠めた思ひであった。恐らく、大きな板チョコは、始末の悪いものだといふ点で他の家と大方同じ結論であったであらう。

経験によって得られるもの、伝聞によって知った方法や考へ方は、多くは、時間の経つにつれて、無意識の間に自発のものの如くに身についてしまふ。それによって省略された労力や思索がどれほどの量に上るか、意外にそれには気づかずにゐるのが普通であろう。

それは逆の方面からみると、私の親戚の家々においてのやうに経験の外に在る事柄について独創的に新しい合理的解決を与へて行くことが如何にむづかしいことかがよく分ることになる。

飴のかたまりを小さくして口に入れる方法といへば、かち割って小さくする以外に手がないことは誰にも分ることだ。氷を割ってその上にスコッチを注ぐとき、バーテンダーは、大抵アイスピックを使ふ。そして必ず氷の一部か半分ぐらゐまでが粉々になって散ることを免れない。時には掌を突くこともある。それが一つの酒場の風俗であることはそれでよいが、飴や板チョコは、握れば融けること氷と同じだが、もっともっと始末が悪い。蟹の脚も木の棒で叩きわるアメリカの風俗に比べて、日本人が手先で割箸をうまく操って実を出して食べるのは、彼の人々には異様な方法であらうが、一つの文化的な傾向として評価することができる事がらと云へるだらう。しかし、その文化的な傾向は、日本人一人一人の生得のものではなくて、日本人社会の伝統にもとづいて人によって好機があれば汲み取られて維持されてゆく方法である。

私の板チョコの割り方を考へると、大げさな云ひ方をして良いなら、正しく文化の一つの伝承されるパターンの一つのあらはれである。今年のクリスマスの頃には、私の親戚のどの家でも、新しい文化的な工夫を採用して、大きな板チョコが割られることになるであらう。そして大きな板チョコの人気は末永く廃れないでつづいて行くだらう。



# 暗い季節

栗山理一

例年のように今年も入学試験の季節がめぐってきた。私の子供たちはとっくに学校とは縁が切れているが、そろそろ孫たちに順番がまわってくるようになった。三女の娘はこの四月から小学校に入るが、昨年の秋ごろから私立の小学校を志望し、なにやかやと相談をもちかけてきた。無条件で受けつけてくれる公立の小学校でいいではないかとすすめる私に対して、三女はわが子の受験苦を案じて、上級学校を併設する私学に入れたいという。そして受験準備のために塾に通わせたり、つてを求めて走りまわっていたようだが、結局は二つの私学とも失敗してしまった。夫が勤務する会社からアメリカ駐在を命ぜられて二年ばかり外国生活を余儀なくされたため、孫娘が帰国してきた時は、満足に日本語は話せない情態であった。そのおくれも響いていたと思われるが、その点を冷静に評価もしないで、しゃにむに安易な道をわが子に選ばせようとする三女の親心に私は同情しなかった。

二女は三人の娘を同じ私学に通わせている。その上の娘が四月には六年生になる。先日、その娘をつれて受験に行ったという話を耳にした。隣家に住んでいるのに、事前に私に相談することを避けたのは、おそらく私の反対を予期したためであろう。後でわかったのであるが、進学塾とかいう所の試験を受けたというのである。小学生が塾に入るのにも入試があるということを知ったのは、私には意外であった。さいわい合格したとかで二女は安心した様子であったが、私は憮然とした。毎日通う小学校の教科を一応消化するだけでは、中学校の入試には心もとない

という事情があるとすれば、それはどこかが狂っているのではないか。私が中学校を受験したのは半世紀以上も過去のことであり、その後の上級学校の入試も激烈な競争であったが、私は塾へ通ったことも家庭教師についた経験もない。そのことはおそらく私だけでなく、当時ほとんどの受験生にも共通する事情であったように思う。私たちは少年時代からひとり孤燈の下にコツコツと教科書を復習し、わずかの参考書をちぎれるまで反復学習しただけである。「韋編三たび絶つ」という語が「孔子世家」にあるが、中学生の時、私が使用した三省堂のコンサイス英和辞書は紐が切れてバラバラになったが、私は全部の単語を暗記することができた。そういう学習方法を人に教えられたわけではなかったが、それが最良の方法だと自分で勝手に決めたまでである。自分で判断し、選択し、実行するより外に道はなかった。「自主独立」などという語は後年になって知りえたことであるが、私たちの教育環境とはおよそそんなものであった。中学校の入試から大学卒業まで、保護者が付き添ってくるという風景などはもとより皆無であった。これは戦後になっていつしか流行となったものであり、女子の進学率が高まってきてからの珍現象であろう。昔から成人した男子と区別する意味で「女・子供」という呼称が行なわれてきたが、男性の女性化・女性の男性化という今日の風俗は、両性を同質化しようとする錯覚とともに男性の自信喪失を意味するものともいえよう。

男女を問わず高度の教養を身につけようとして大学へ進学することは好ましいことである。けれども、およそ明確な目的意識もなく、ただ学歴社会へ適応するために大学受験へ殺到する若者の姿を見てきたばかりの私は、まもなく訪れる開講日を待つ心は物憂いばかりである。三月ももはや残りすくない。桜の開花も今年はおそいという。年々歳々、こういう暗い季節を送迎して私は老境をふかめてゆく。



# 幼年時代

池田　勉

## 一、写真

私の郷里の——播磨の国で、兵庫県の中部といっても、丹波に近い山里であるが——家の土蔵の中に、はやくなくなった母のタンスが一さお遺されている。紫がかったえんじ色に濃く塗った、若い母の嫁入りに持参したときの、いかにも華やいだ装いが想われるものである。この母を、私は十代の終り頃に喪ったので、母恋しさの心情のうえに、青春の不安が重なって、ながく心を悩ませた。母が亡くなった翌年の春であったか、私はひとり土蔵の中で、このタンスの冷やかな肌を撫でながら、思いに沈んでいた。ふと、母の心のなかに尋ね入ってみたいような気持になって、私はそのタンスの小引出しの一つを、そっと、あけてみた。そこに一葉の写真を見いだした。写された映像は古びて茶褐色に変色しているが、それは、まぎれもなく、私の生まれて初めて撮った写真であった。台紙の裏には、生誕百日目の撮影である旨が記されていた。郷土の習わしで、生まれて百日目には、お客参りと称って、氏神様に参拝して、すこやかな成長を祈願する、その日の写真であることがわかる。裾の長い晴れ衣を着て、椅子に坐らされている。足は着物の裾にかくれて見えないが、おそらく、両足をなげ出しているのであろう。まだ坐るまでに身体が安定していないからであろうか、椅子のうしろから、誰かの大きな両手が、そっと支えてくれているの

が見える。（あとで聞くと、それは祖父の手であった）頭の大きな幼児である。生まれて初めて見る写真機に、というよりも見知らぬ写真屋さんに対して、照れて恥かしがっているのであろう。頭を、やや、うつむきかげんにしているので、きれいに剃った、大きな頭の鉢が、おかしいほど大きく写し出されている。眼は、すこし、ふせた形になっているが、切れ長で、頬もふっくらと豊か、健康らしい。はにかんで、頬の下に持ちあげている左の腕も、やわらかく肥えているようすである。私は十二月十五日の生まれであるから、この百日目は、三月末に近い一日であっただろう。そう思ってみると、幼い私の姿をやわらかい春光がつつんでいるような感じに誘われる。そのとき私の家は祖父母と父母と、私との五人の家族であった。そして長男の私を産んだ母はまだ若くて、二十代の半ばにも達していなかったにちがいない。

わが母の吾を生ましけむうらわかき　かなしき力おもはざらめや

## 二、さかやき

田舎の私の家では、三歳ぐらいになるまで、私の頭は、さかやきといって、剃刀できれいに剃られていた。剃るのは、いつも祖母の役目と、きまっていたようであった。祖母の剃りかたが下手だったからかもしれないが、とにかく頭を剃刀でゴリゴリ剃られるのは、ひどく痛くて、閉口だった。だから私は、このさかやきを嫌って、いつも逃げまわった。菓子でうまくつられたり、すかされたり、母に叱られたりして、あげくのはては、私は観念して、祖母の膝の上に坐るのであった。場所は陽当りの明るい縁側ときまっていた。祖母は、さかやきを痛がる私の気持をまぎらわせるために考えついたのであろうか、小さい真鍮の金たらいに水を張って私の目の前に置き、それに乾



したチリメン雑魚（ざこ）を数匹、水面に浮かべるのであった。そして、その金たらいの縁を手で軽くたたくと、水面には、こまかい波がチリメンじわのように立って、水の中の雑魚は、まるで生きて泳いでいるように見えた。剃られる痛さをこらえて、涙ぐんでいる私の双の眼には、波の下に泳ぐ小魚の姿が、幻のようにあやしく跳って映った。いつしか、私は、さかやきの痛さを忘れているのであった。

眼底（まなそこ）に幻の魚の泳ぐごと　あやしき絵図を知りそめにけり

## 三、月

祖父にとって、私が初めての孫であったからか、幼い私をたいへん可愛がってくれたように思う。祖父は明治の頃の郡に置かれていた郡役所につとめて、郡長の下で書記官をやっていた。田舎では、ひときわ、おしゃれで、いばっている祖父であった。金縁の眼鏡をかけ、口ひげをピンとひねりあげていた。山高帽子をかぶり、インバネスなんかを羽おって、ステッキをふりふり小柄な身体をそらして、気どって出勤するのを、私はよく見送った記憶がある。そういう祖父も孫の私には、底なしに甘かった。夏の宵などには、私を背に負って、よく散歩に出た。私を背にして、祖父が小走りをしてみせると、空の月が、月の兎も、白雲の流れも、私といっしょに大空を走るように見えた。それを私はひどく面白がった。声をあげて喜ぶ私を背負って、祖父は、いくたびも路上を小走りして、空の月と競争してみせた。祖父はなかなか達筆であった。今も土蔵の棚に並ぶ什器類の箱書きを見ると、筆勢すぐれた文字のあとをとどめている。私などの及ぶところではない。

祖父の背に負われて見しか　満月の兎はねとぶ　さやかなる光

## 四、鬼

晴れた秋の夕暮れ、西空が今日もまっ紅に夕焼けして、暮れようとしていた。その夕焼け空の一角を断ち切るように、西隣りの造り酒屋の大屋根が黒々とそびえ立っている。大屋根の頂上の端に置かれた大きな鬼瓦も、逆光のために、ただ黒い形姿だけを見せて、こちらを見おろしている。幼い私は、米倉の前の裏庭に立って、その夕焼けの焦げるような強い赤さと、黒い形の鬼瓦とを、ぼんやりと仰ぎ眺めていた。すると、急にその鬼瓦が動いて立ちあがるように見えた。立ちあがると、両手をのばして、私の方におそいかかってくるように感じられた。一瞬、私は息がとまるような恐怖におそわれた。私は身体をかたくして、あっと叫び声をたて、すっ飛ぶように母屋に駆けこんだ。母はかまどの前で夕餉のしたくにおり立っていた。何ごともなかったように、かまどの火は赤く燃えていた。私は声も出ず、心につき入るような恐怖感にとらえられて動けずに立ちすくんでいた。幼い魂に初めて刻みこまれた強烈な怖れであった。

まざまざと見し鬼ゆえに恐ろしさ　母にすがりて泣くすべはなく



## 小野田少尉と教育

紫藤邦子

「人生における最も大切な時期をジャングルの中で過した事を悔まない。任務を達するという目的の為に全力をあげて充実した生活を送れた事に、幸せを感じている。」という意味の事を語った。あのキラキラ光る両眼と気魄に満ちた明るい顔は「気の毒」とか、「可哀想」とかいう、我々の期待をみごとに裏切った。現在、あれだけの顔を持った人が、どれだけ居るだろうか。この恵まれた環境（ジャングルよりも）にあって悔いのない三十年を送った人が幾人居るだろう。社会が悪いとか、学校が悪いとか、理解出来ないと言って終ってしまう。人のせいにする以前に、何故、自分の任務を全うすることを考えないのだろう。学生は学問を、母親は子供を育て、良い環境の家庭をつくるということを……。

何か一つの事に打ち込んで、成し遂げる事の出来る人は、科目が変っても成し遂げる事ができるというが、小野田さんの記者会見を見ていると、この人は、ジャングルから急に、この都会へやって来ても、ちゃんと生活をして行ける人だということが推測できる。根本的な点で、我々よりずっとまともに思える。反対に教えられてびっくりしている。そして彼は、誰よりも人間らしく人々の心を打ったに違いない。さすがの記者団も、キビキビと折目正しい態度に襟を正しているようだった。戦友を失った事が、山を下りたきっかけになったか？と聞かれ「逆ですよ。憎しみの方が強くなります。誰だって、普通の男であれば、目の前で戦友を殺されたのを見れば、そう思うのがあたりまえではないですか。」と怒りと、くやしさでキッ！となる。今日では、大人も子供も、反射的になり、事の根本を考えたり、見たりすることが後になって来ている。洋服を着ていると誠に恰好が良いが、裸にしてみると背

佐々木美岐

前略、今年も又、お世話になる頃になりました。私は残念ながら今年は全然書く気がせず、失礼しますので、どうぞお許し下さいませ。原稿の集り具合は如何でしょうか？　勝手ですけど心配しております。物価高でお世話役の方もお気の毒に思っております。何としても続けていただきたい花信風ですもの、お侘びのおしるしに、キャラメルを作りました。皆様で召し上って下さい。どうぞ御主人様にも差し上げて下さいませ。我家の主人は、喘息で入院し、子供三人とメッだのゲラゲラだの、のんきに、急いでの生活を過しております。腕まくりのきよのを御想像下さい。じゃ又、林さんによろしく。

本多弘子

前略、本日、只今、現金書留で、オジョー宛て会費を送ってきたところ、貴女からおハガキが届いておりました。ご迷惑おかけしていつもごめんなさい。今回は、会費だけ送らせて頂きました。忘れていたのではなかったけれど、郵便局までちょっとあるので、出にくくつい遅れてしまいました。三月やよいになって、何もかも萌え出づる春の気配、濃くなってきました。私は奥歯を腫らして、それが抜けなくて、右のホッペをふくらまして、十日ばかり春の陽気とは反対に憂鬱な顔をしています。でも早春は大好きです。皆さんによろしくね。さようなら。

重見泰子

こちらは、庭の木も、草も芽が吹き、春らしくなって参りました。けれども今年はいつもより風が冷たく感じられます。「花信風」いつも御苦労さまです。原稿ですが、大変、勝手を申しますが、今回は休ませて下さい。お願いします。後略。



## 編集後記

佐藤美智世

今年も危い橋を渡りながら完成という所までこぎつけました。年毎に一人々々がいろいろの人間関係が増え、深まり忙しくなっていく様子が、電話・ハガキ等で伝わってきて、まさに人生の真只中に投げ出されて、夢中になって生活している年代なのだなと感じさせられます。逆に先生方は、今号「敬老心」「幼年時代」などを書かれているように、静かな年代へと入ってゆかれるように思われ、先生方が、いつまでもお元気で、私達を見守って下さる様にと願わずにはいられません。どんな小さな事でも続けることはたやすいことではありません。出来る間は出来る人が縁の下の力持ちとなって、「花信風」を続けていこうではありませんか。

林　節子

紙代、印刷代の値上りで頁数をへらし、どうやら発行までこぎつけました。

先生方の作品も随筆風であって、それぞれ心にひびく何かが感じられ、読み返すごとに新たに感激をいたします。手紙だけでなく、お目にかゝって感謝の気持をお伝えしたいと思い暮しているのです。

人の心が通じにくくなった世の中にあって、「花信風」のつながりが、より深く発展するように、積極的に働きかけ合い、人間を信じてゆきたいものです。

反応のないという事は寂しい事です。先生方へでも、私達へでも何か感じたことや意見を送ってください。

花信風第七号
昭和四十九年五月一日発行
発行責任者　佐藤　美智世
近藤　由紀子
林　節子
印刷　野本印刷